

書評 関係性の学び方：「学び」のコミュニティとサービスラーニング

サラ・コナリー、マージット・ミサンギ・ワッツ 著 山田一隆・井上泰夫 訳
晃洋書房（2010年）

山口 洋典
(立命館大学)

「私の中では…」という学生の語り口が耳に付くようになった。評者にとっての違和感は「なぜ、中に留めるのか」、また「なぜ、中に留まるのか」という点にある。そうした語りに出会うときには、もっと、「私」を「社会」へと開いて欲しい、そんな願いを抱かざるをえない。ただし、そうしたもどかしさに出会う機会があるなら、恐らく本書が説く「学び」の方法を学ぶことの意義を十分に実感できることだろう。

書題の『関係性の学び方』は、訳者らによって名付けられたものだ。本書は「訳者によるはしがき」にもあるように、「米国の初年次オリエンテーション用ブックレットとして刊行」されたものを、「日本における大学等高等教育機関が求められる新しい戦略的教育手法を考えるヒントを提供することを企図して」出版されたものである（p.vii）。その特徴は「原著がターゲットとした読者である学生はもとより、『学び』のコミュニティやサービスラーニングを新しい戦略的教育手法として導入を検討している大学関係者も読者として想定している」ことにある。そのため、原著では間接話法となっている部分を直接話法にするなど訳出にも工夫を施しつつ、二部構成の形態をとって、前半部で「学びのコミュニティ」、後半部で「サービスラーニング」と、副題を順に紐解いていくという構図となっている。

そもそも本書の原典は1冊の本ではなく、2冊のブックレットを前述のとおり一つの名前で束ねたものだ。具体的には、Pearson Educationが刊行するStudent Orientation Seriesと名付けられた（関西以外の大学では「低年次」などと言われるのかもしれない

いが）低回生向けのハンドブック群の第1巻と第2巻を訳したものである。日本語版の出版にあたっては、上記のような特徴をつけるべく、原典では第1巻の『Service Learning』（Margit Misangyi Watts 著）を訳書では第二部に、第2巻の『Learnig Communities』（Sara Connolly 著）を訳書では第一部に、という順で所収された。シリーズ名称の3語の頭文字を取ると、皮肉なことに「救命信号」を意味する「SOS」となるのだが、これは当初からの意図であるようだ。事実、原典の表紙には、海難事故の場面でよく見られる、オレンジと白で彩られた浮き輪が、共通の装丁として読者の目を引くものとなっている。

まずは目次をもとに内容を概括してみよう。まず、「訳者によるはしがき」は、ここまで述べてきたとおり、なぜ本書を訳出したのか、そして訳出にあたってどのような工夫を施したのかが記されている。同時に、高等教育政策の中で新たな教育手法が求められる背景と、その具体策として学部や専門を横断した小集団科目において地域社会との協働のもとでサービスラーニングという方法を企画開発していくことの意義に関する、短い研究ノートという性格をも見いだすことができる。日本語版が学生のみならず、広く大学関係者を読者として設定された企図が伺える。

第一部『学び』のコミュニティは、6章からなる。まず「イントロダクション」では、ある種の孤独感や孤立感を覚えたことのある3人の学生が、いかに仲間と出会ったかに関する自己物語が紹介され、大学生活がうまくいかないのは決して特別なことではない、と、呼びかける。続いて『学び』の

コミュニティとは何か」では(1)つながり、(2)リーダーシップ、(3)少数グループ、(4)批判的思考、(5)到達度の5つの視点から、学生どうしの関係構築の有り様が示された後、次章の『学び』のコミュニティのインパクトにて、多様な学生の関わりによつてどのような「評価 (assessment)」がもたらされ、どのように「評定 (assessment)」されるのか、言わばコミュニティ形成の結果 (例えば、どう受け取られたか) とその成果 (例えば、どう変わったのか) について、それぞれ先行研究や実践事例をレビューし、まとめられている。そして、「キャンパスの居場所探し」では「学び」のコミュニティが類型化され、「かかわりを持つこと」では導入期以外の学生 (関西流に言えば「上回生」) に向けたプログラム以外の方法によるコミュニティへの参加の契機として「ピア・リーダー」(p.58) というロールモデルの存在が提示される。

興味深いのは、いくつかの大学での実践事例から、「学び」のコミュニティが4つの「タイプ」(p.39) に整理され、その「特徴」(p.55) がまとめられていることだ。その4つとは(A)パッケージ型の科目や教養を涵養するゼミナールなどの「学生コーホート・統合ゼミ」モデル、(B)複数科目の同時登録で履修を促す「連携科目」モデル、(C)複数教員の科目を結合させた新たな科目をチームティーチングで進める「調和した勉強モデル」、(D)一定期間を寮などで居住する「生活し学ぶ『学び』のコミュニティ」モデルである。そうして終章の「展望とプロフィール」では、冒頭で紹介された3人とは別の3人の学生にインタビューされた内容から、コミュニティに「参加していない学生は共同体の経験を捉え損なっている」(p.65) と、他者との関わりを通じて「意見の不一致や問題が必然的に発生する」(p.65) ゆえに、「助言」(p.66) し合える関係になったとき、自らの「殻を破る」(p.67) ことができる、と、まとめている。また、ブックレットという性格を反映して、各章の末尾と第一部の終わりには原典の読み手である学生たちのへ問いと、使い手の教員への参考ウェブサイト、さらに文献が提示されている。

第二部「サービラーニング」は、7章からなる。第1章「サービラーニングとは何か」で定義が、第2章「なぜ、サービラーニングなのか」では目的が、それぞれ示された上で、第3章「わたしにとってどのような効果があるのか」にて、個の人格形成とあわせて「社会的責任を受け入れ」る「educated citizen」(p.103) となり「生涯にわたって学び続ける」という「lifelong learner」になると、教育手法としての意義がまとめられている。サービラーニングには多様な定義がなされているものの、共通するのは「他者に奉仕する」教育プログラムを通じて「創造的に問題解決」できるよう「意思決定できる人になる」ことが期待されているという (p.95)。そのため、第4章の「地域にとってどのような効果があるのか」では「多様な文化や価値システムを理解することができ、卒業した後に人生を送ることを選択した地域社会での生活に参画する」ようになると示されている。

サービラーニングの効果は自他共に大きいことは、誰もが否定しないだろう。しかし、そんなに簡単に事が運ぶわけでもない。したがって、第5章では「サービラーニングに参加したとき、どのように学ぶのか」、第6章では「どのようなプロジェクトがあるのか」、第7章では「どのようにサービラーニングを始めるか」、と、読者をまちへと誘う。そして講義室を離れて地域社会で学ぶ上では学習者に「日常生活を詳細に検討する」(p.109) ことが求められるため、「認識」と「感情」の変化の過程をふりかえること (reflection) が極めて重要となることが浮き彫りにされる。要するに、ポートフォリオなどと呼ばれる現場の記録や、活動の日誌等をつける習慣が欠かせない、ということだ。

なお、第二部の終わりに提示される「取り組みを見つける」上での12のガイドライン (p.139) は、何もサービラーニングに留まらず、地域参加型の学習、転じて座学以外の学びに通底する指摘と言える。要約すると、情報の収集、政策の分析、目標の整理、目標の理解、途上での自己評価、辛抱強いコミュニケーション、行動の記録、期待の明確化、

会議への出席、活動可能時間の提示、契約の締結、以上 12 点だ。ちなみに本評では詳述しないが、第二部の各章の扉で紹介されている格言（例えば、キング牧師の言葉や中国のことわざ、など）は、学習者の「学び」への姿勢を問い直す至言として位置づけられる。また、巻末の書式集は、大学関係者のみならず、インターンシップやゼミ活動で学生を受け入れる NPO 等にも参考になるだろう。

本書をもとにすれば、サービslラーニングがインターンシップと決定的に異なることが明らかとなる。それはインターンシップがどこで何をするのか、が鍵になるのに対し、サービslラーニングでは誰に何をするのかに力点が置かれるためだ。その際、誰と共にするのか、いるのか、あるのか、そうした多様な他者の介在が「学び」への扉を開くのである。何より、本書でも「学び」と括弧付きでこの語が取り扱われている理由は、勉めて強いる「勉強」(study)として業(わざ)を一方的に授かる(つまり授業)とは異なり、能動的なもの・こと・ひとに関わる行動的な学習者「active learner」(p.26)となることが提起されるためだろう。

関西の大学に籍を置いてきた訳者らは、あとがきで「信頼できる仲間や地域社会への貢献を通して自己肯定感を取り戻し」(p.165)ていくことが、現代の大学教育において喫緊の課題であることを学生とのやりとりを参考しながら示している。それはちょうど、正解を探す「勉強」に長けてきた大学生たちが、過大な承認欲求(例えば、太田 2007)のもとで、所属を吟味しすぎるにより、結果として「所属なき承認欲求」がもたらされている状況にあるのではないかと評者は捉えている。だからこそ、結果として自らの役割を見出しやすい、あるいは目の前の他者から役割が付与される『『学び』のコミュニティ』と「サービslラーニング」は、今の時代に生き、暮らし、学ぶ学習者の無言の「SOS」に応える枠組みなのだろう。

このような時代の状況を鑑みれば、本書が原典の順番どおりではなく、「学び」のコミュニティからサービslラーニングという流れで訳出された意図

に合点がいく。すなわち、他者との関わりによる「学び」の前に、自らの身の置き所として学生どうしのコミュニティ形成が先に必要なのではないか、ということだ。であれば、原典のとおり、間接話法は間接話法で、という方が、学生の関心を引いたかもしれないし、転じて日本人によって書かれた本文中のイラスト、写真なども織り交ぜて見た方が、日本の大学生たちにもより響くものになったかもしれない。

いずれにせよ、現代 GP などをはじめとして、各大学にサービslラーニングが広まりつつある今、本書は全入時代における大学の「学び」を熟考する上で大事な書籍の一つだろう。また、学生たちを受け入れる、さらには大学生に留まることのない、lifelong learner たちに、講義室とまちをつなぐ、重要な一冊でもある。さらに既述のとおり、NPO 等での実践家にも響く言葉や素材に満ちている。訳者の労を多としたい。

冒頭で、「私の中」に留め、あるいは「私の中」に留まることによって「私」にこだわる学生の声を紹介した。実はその対極に、「今、社会は…」とくくる学生たちの語りも気になっている。近年、自ずと他者との関わりを持たざるをえない事柄、例えばネットワーク、ビジネス、またアートやデザインなどに、「ソーシャル」という形容詞が掲げられる傾向があるし、弁護士や議員といった専門職にも「社会派」という冠が付与されるようになって久しい。本書が、時代に生き、次代を担う学生たちに、「私」と「社会」をつなぐ、転じて「私」を「社会」に開き、大学とまちを接続する学びへの補助線を提示する手引きとされることを願うところである。

【引用文献】

太田肇. 2007. 承認欲求:「認められたい」をどう活かすか? 東洋経済新報社.